

## 審査の結果の要旨

氏名 田仲洋己

本論文は、中世前期の三大歌人源俊頼・藤原俊成・同定家を中心に、院政期から新古今時代にかけての歌人と歌書とを考察したものである。まず序章において院政期・新古今時代の和歌史を略述しつつ考察対象の歌人・歌書を位置づけた後、本論を三部二十の章から構成する。

第一部は源俊頼およびその周辺に関わる論で、俊頼について源師賢からの影響を跡づけ(第一章)、『俊頼髓脳』が「頼通的世界」を語りつつ、藤原忠通をも読者として想定していたと推定し(第二章)、俊成の大叔父藤原道経の歌を分析して、俊頼の時代と俊成をつなぐ存在と規定し(第三章)、藤原清輔『袋草紙』の「子供の詠歌」に注目してここに和歌の無縁性への促しを発見し(第四章)、かつ子供の詠歌記事には子供らしさを作為的に演出する面があると説く(第五章)。

第二部は藤原俊成とその周辺をめぐる論で、俊成が藤原伊通・源雅定を敬慕した理由を、二人の贈答歌を解析することから明らかにし(第一章)、『歌仙落書』の撰者を藤原惟方とする新説を提起し(第二章)、『三百六十番歌合』成立の経緯を改めて解明することで覚盛撰者説を補強し(第三章)、女房歌人八条院六条の歌と事跡を精査してとくに定家と式子内親王との関係を新たに洗い出し(第四章)、惟明親王の「正治初度百首」歌を分析してその多方面の歌学びの軌跡を析出し(第五章)、『古来風体抄』初撰本の式子内親王進献先説を強化し(第六章)、『俊成三十六人歌合』が偽撰であり『時代不同歌合』を模したものであることを確定する(第七章)。

第三部は藤原定家に関係する論で、定家の初期百首「一句百首」「一字百首」を詳細に読み解いて定家の表現方法の形成を跡づけ(第一章)、『奥入』所載歌等と定家の本歌取との密接な関係を具体的に定位し(第二章)、定家の恋の実情詠における『源氏物語』『狭衣物語』の引用を整理して、そこに古典に人生の真実を見出す定家の本質を取り押さえ(第三章)、定家の「夢の浮橋」詠は『源氏物語』の藤壺と光源氏の関係をも象徴し、かつ定家亡母への哀傷の心を含むと読み込み(第四章)、後鳥羽院の勅勘を被った定家の野外柳詠に源実朝への哀悼の意の伏在を指摘し(第五章)、『定家十体』後鳥羽院撰説を否定して、定家真作説を補強し(第六章)、『毎月抄』定家真作説を再構築して順徳院宛先説を改めて支持し(第七章)、西園寺公経の正治・建仁期の『源氏物語』享受を新たな読解から明らかにする(第八章)。

いずれの論考も、深い読解と豊富な例証、周到な研究史への目配りと堅実な論理展開に支えられて説得力に富み、中世前期の和歌史の重要課題の問題点を浮き彫りにしつつ解決への道筋を明快に提示し、当該研究対象における必読論考となりえている。第二部第二章および同第七章のごとく、すでに学界において新たな定説となりつつある論考も含まれる。扱われた歌書の中には、さらに論者によって文学史的意義づけがなされることが望まれるものなども存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。